令和5年度　教育論文（研究同人論文）

研 究 主 題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実

～主体的に学び、考えを伝え合う道徳科の授業づくりと、
なりたい自分とつなぐ学校総体の取組の工夫～

児童が主体的に学び、
考えを伝え合う授業づくり

なりたい自分とつなぐ道徳
カリキュラム・マネジメントの充実

道徳教育の充実につなぐ
日常活動の工夫

教科等	特別の教科　道徳
学校名	甲佐町立龍野小学校
氏名	龍野小学校研究同人

はじめに

本校は、令和３・４年度文部科学省より「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」及び熊本県教育委員会・甲佐町教育委員会より「道徳教育研究推進校事業」の研究指定をいただきました。

平成２７年に行われた学習指導要領の一部改訂により「道徳の時間」が「特別の教科　道徳」として教科化されました。「考え、議論する道徳」への質的改善を求め、移行期間を経て小学校では平成３０年度から全面実施されています。

子供の心の成長に関わる現状を見たとき、家庭や地域社会の教育力の低下、体験活動の減少、自尊感情の低さ、規範意識の低下、他者意識の低さなど、子供の心の活力が弱っている傾向が指摘されています。このようなことについては、本校も同様で、特に規範意識の醸成や自己有用感の向上などを目指し、家庭や地域社会と連携した教育活動を推進していく必要性を痛切に感じています。

そこで、本年度も「なりたい自分」を目指し、自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実に取り組んできました。「なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実」、「児童が主体的に学び、考えを伝え合う授業づくりの工夫」、「道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫」を手立てとして、学校総体としての取組を工夫し、研究を深化させてきました。

本研究では、道徳科で授業をコーディネートする力を育成することで、他教科の授業改善にもつながることを目指して取り組んでいます。道徳教育を基盤とした学級経営を行うことで、確かな学力の育成にもつながると考えており、子供の姿から少しずつ手応えを感じているところです。

ここに本校の全教職員で取り組んだ研究の一端を紹介し、様々な観点から御指導をいただき、さらに研究を深めていきたいと考え、教育論文としてまとめました。どうか忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

―目次―

はじめに
目次

Ⅰ　研究主題について

１　研究主題 1

２　主題設定の理由 1

（１）教育の今日的課題から

（２）本校の教育目標から

（３）児童の実態から

３　研究主題について 2

４　研究の仮説及び仮説検証の手立て 2

５　研究の全体構想図 4

Ⅱ　研究の実際

１　【手立て１】なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実 5

（１）「道徳カリキュラム・マネジメント表」の改善と取組の工夫

（２）「なりたい自分」と児童のくらしをつなぐキャリアパスポートの工夫

２　【手立て２】児童が主体的に学び、考えを伝え合う授業づくりの工夫 9

（１）授業展開における４つの工夫

実践例①　第１学年「二わのことり」の授業実践から

実践例②　第４学年「ネコの手ボランティア」の授業実践から

実践例③　第６学年「２５人でつないだ金メダル」の授業実践から

（２）授業を支える共通実践事項

３　【手立て３】道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫 18

（１）児童の主体性を伸ばす活動の充実

（２）異学年交流を促す環境整備

（３）教師のコーディネイト力を伸ばす研修の充実

Ⅲ　研究の成果と課題

１　成果 19

２　今後の課題 20

引用文献及び参考文献
おわりに

Ⅰ　研究主題について

１　研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実
～主体的に学び、考えを伝え合う道徳科の授業づくりと、
なりたい自分とつなぐ学校総体の取組の工夫～

２　主題設定の理由

（１）教育の今日的課題から

「なりたい自分」とはどんな自分か、よりよい生き方とはどのような生き方だろうか。社会で生きている私たちは、日々このような問いに立ち止まり、自分なりの考えを導き出し生活している。子供たちも同じように、学校生活の中で、自分と異なる他者と出会い、多様な感じ方、考え方に触れる中で、自分のよさや今まで気付かなかった自己の側面を発見し、自分なりの生き方を見つけようとしている姿がある。

子供たちが生きる今は、多様な考え方、学び方、働き方、生き方があり、まさに変化の激しい予測困難な時代である。数え切れない選択肢の中から、自分で考え必要なものを選択、判断する力や、他者と協働して課題解決に臨むことができる力の育成が求められている中、その基盤となるのが、「どんな自分になりたいか」という生き方に対する主体性ではないかと考える。

学習指導要領改訂の基本方針においても、「道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにしていくなどの改善が必要と考えられる。」と述べられており、よりよい生き方の探究と道徳教育は深く関わっている。

（２）本校の教育目標から

本校は、学校教育目標を「ふるさとに、笑顔広げる龍野っ子の育成～子供たちの夢を支える学校づくり～」とし、「健康で元気にチャレンジする子供」「自他を認め合い、励まし合う子供」「自分の学びに自信を持つ子供」を目指す児童像として掲げている。知・徳・体の視点から考えると、児童一人一人が自分のよさや伸びを実感できる教育活動の推進を目指すものである。さらに、目指す児童の姿とは、将来を見据えて他者と協力しながら自らの力を高めていこうとする姿であるともいえ、その実現には、自分事として考え他者と共に学び合うような授業改善が大きく関わっていると考える。よって、目指す児童像の実現に向けて研究を進めることが、学校教育目標の具現化につながると考えた。

（３）児童の実態から

本校の児童は明るく朗らかで、休み時間になると多くの児童が外遊びを楽しむ活力にあふれている。昨年度に行った児童アンケートの結果から、「自分のことが好きですか」、「夢や目標はありますか」という項目の数値が共に上昇しており、児童の自己肯定感が上がりつつある状況にある。

一方、相手意識や規範意識が十分に身に付いていないことで関わり方に困難を抱える児童も見られる。また、他者と比べたり他者からの目を気にしすぎたりする余り、考えを伝えることに消極的になってしまう児童も少なくなく、引き続き、一人一人の自己肯定感を支え、伸ばしていくことが必要である。

以上の実態から、昨年度に引き続き、全教育活動の要となる道徳教育において、児童一人一人が自己を見つめよりよい生き方を目指すことができるような児童の育成に取り組んでいくことが、本校の課題改善につながると捉えた。

３　研究主題について

○「自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実」について

昨年度の研究テーマの主題は「自己を見つめ、よりよい生き方につなぐ道徳教育の充実」であった。本校では、令和３・４年度文部科学省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」として、道徳教育に関する研究に取り組んできた。本年度は、これまでの研究内容を生かし、よりよく生きようとする児童の育成につながるような道徳教育の充実を図っていく。児童がよりよい生き方への具体的なイメージを明確にもち、児童・教師共に目的意識をもって道徳教育を進めていくことができるよう取り組んでいく。

また、「主体的に学び、考えを伝え合う」力を育む授業改善に取り組み、児童の学ぶ力の向上につなげていく。

４　研究の仮説及び仮説検証の手立て

【研究の仮説】計画的・発展的な教育活動のもと、児童が主体的に学び、考えを伝え合うことができるような道徳科の授業づくりやなりたい自分とつなぐ学校総体の取組の工夫を行えば、自己を見つめよりよく生きようとする児童を育むことができるような道徳教育の充実を図ることができるだろう。

仮説検証のために、以下に示す３つの手立てを設定した。

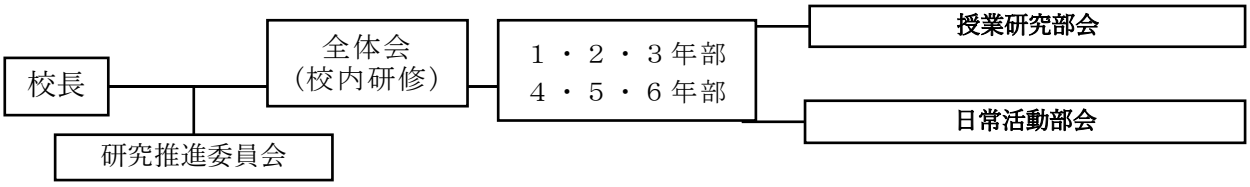
１．なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実	２．児童が主体的に学び、考えを伝え合う授業づくりの工夫	３．道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫
①　「道徳カリキュラム・マネジメント表」の改善と取組の工夫 ②　「なりたい自分」と児童の生活をつなぐキャリアパスポートの工夫	①　自分事として考える導入の工夫 ②　問題意識をもつ教材提示、発問の工夫 ③　主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の工夫 ④　自己をみつめ、道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫	①　児童の主体性を伸ばす活動の充実 ②　異学年交流を促す環境整備 ③　教師のコーディネイト力を伸ばす研修の充実

手立て１では、道徳教育を軸とした「道徳カリキュラム・マネジメント」を計画し、児童の「なりたい自分」につなぐ取組に重点を置いた。道徳科の授業を軸とした教育活動を計画的・系統的に進めていき、普段の生活の中で自分自身を捉え直すことをねらいとした。

手立て２では、児童が主体的に学ぶことができる学習活動の工夫に加え、他者の考えを認め合い、共に伝え合うことのできる授業を目指した。各学年の実態に応じて、上記の４つの工夫を組み込みながら授業づくりに取り組んでいくこととした。

手立て３は、道徳の授業に限らない常時活動を活性化させ、児童の主体性を伸ばす手立てである。さらに、本校の課題である自己肯定感や規範意識の醸成にもつなげたいと考えた。

児童の道徳性はあらゆる教育活動において育まれていく。よって、研究の組織を見直し、授業研究部会と日常活動部会での具体的内容を洗い出すことで、道徳教育の充実に向けた取組が計画的に行えるようにした。年度当初に計画した研究の組織は以下の通りである。



部会	メンバー	具体的内容
研究推進委員会	校長、教頭、教務主任、研究主任、各長(必要に応じて)	・研究の方向性や評価など、研究を行う上での課題解決を目的とし、必要に応じて研究主任が開催する。
授業研究部会 〇は各部の長	①　低学年部 【〇藤田、岩永、鬼塚、宗】 ②　中学年部 【〇松岡、松本、奈須】 ③　高学年部 【〇大野、田中、稲葉、梅野、池松】	・授業研究会の運営（付箋紙、授業メモ等の準備） ・必要に応じた事前研の実施、授業改善に向けて ・授業改善に向けた取組（展開の流れ等） ・考えをつなぐ発表の型の活用 ・学びの足跡を示す教室掲示の工夫
日常活動部会	④　「なりたい自分」に近づこうチーム	・地域人材を活用した道徳授業でのＧＴの活用 ・キャリアパスポートの活用 ・道徳教育とつなぐ行事活動の充実
	⑤　いきいき掲示チーム	・道徳教育にかかわる掲示板の作成 ・児童の道徳ワークシート等を活用した掲示の工夫

５　研究の全体構想図

学 校 教 育 目 標

ふるさとに、笑顔広げる　龍野っ子の育成

本校の道徳教育の重点目標

○「なりたい自分」を目指して粘り強く取り組み、主体的に行動する子供の育成
【善悪の判断、自律、自由と責任】

○集団の中で自分の役割を自覚し、友達と協力し合って楽しい学級や学校をつくろうとする子供の育成
【よりよい学校生活、集団生活の充実】

研 究 主 題

自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実
～主体的に学び、考えを伝え合う道徳科の授業づくりと
なりたい自分とつなぐ学校総体の取組の工夫～

【仮説】計画的・発展的な教育活動のもと、児童が主体的に学び、考えを伝え合うことができるような道徳科の授業づくりや、なりたい自分とつなぐ学校総体の取組の工夫を行えば、自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育むことができるような道徳教育の充実を図ることができるだろう

【手立て1】なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実

①「道徳カリキュラム・マネジメント表」の改善と取組の工夫
②「なりたい自分」と児童の生活をつなぐキャリアパスポートの工夫

【手立て2】児童が主体的に学び、考えを伝え合う授業づくりの工夫

①自分事として考える導入の工夫
②問題意識をもつ教材提示、発問の工夫
③主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の工夫
④自己を見つめ、道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫

【手立て3】道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫

① 児童の主体性を伸ばす活動の充実
② 異学年交流を促す環境整備
③ 教師のコーディネイト力を伸ばす研修の充実

学校総体でつなぐ道徳教育

家庭・地域とつなぐ
GT の活用
学び合う教師集団
幼保小中連携

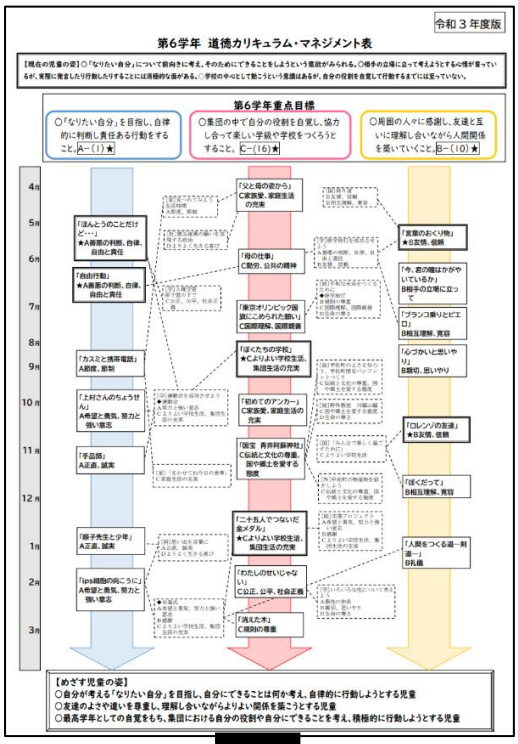
今日的課題　**児童の実態**　**地域社会の要請**

Ⅱ　研究の実際

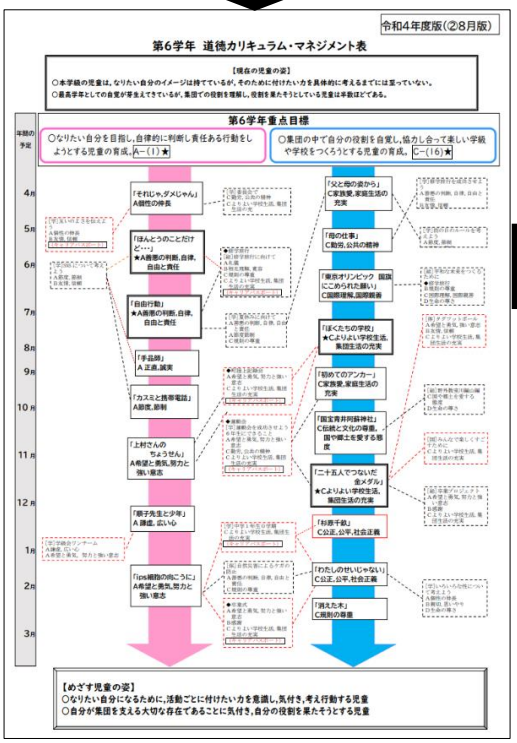
１　【手立て１】なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実

（１）「道徳カリキュラム・マネジメント表」の改善と取組の工夫

道徳教育における年間の見通しをもち、他教科等との学びのつながりがある授業づくりを目指して、本校では令和３年度から「道徳カリキュラム・マネジメント表」を作成している。この表は、児童の実態を基に設定した重点目標を軸に道徳科の教材を整理し、それに関連する他教科・行事等とのつながりを図表化したものである。



初年度、３つで示していた重点目標を次年度では２つに絞り、児童の実態に合わせて活動内容を精選していった。さらに、児童が考える「なりたい自分」に関わる取組と道徳科との関連を明記し、教師自身が児童の「なりたい自分」と道徳教育とのつながりを意識できるようにした。また、年度途中で見直しや修正を重ね、改善点を明らかにして今年度も児童の実際に合わせて作成を行った。道徳授業を軸として他教科等との関連を意識し、計画的に教育活動を行うための見通しをもつことにつながっている。



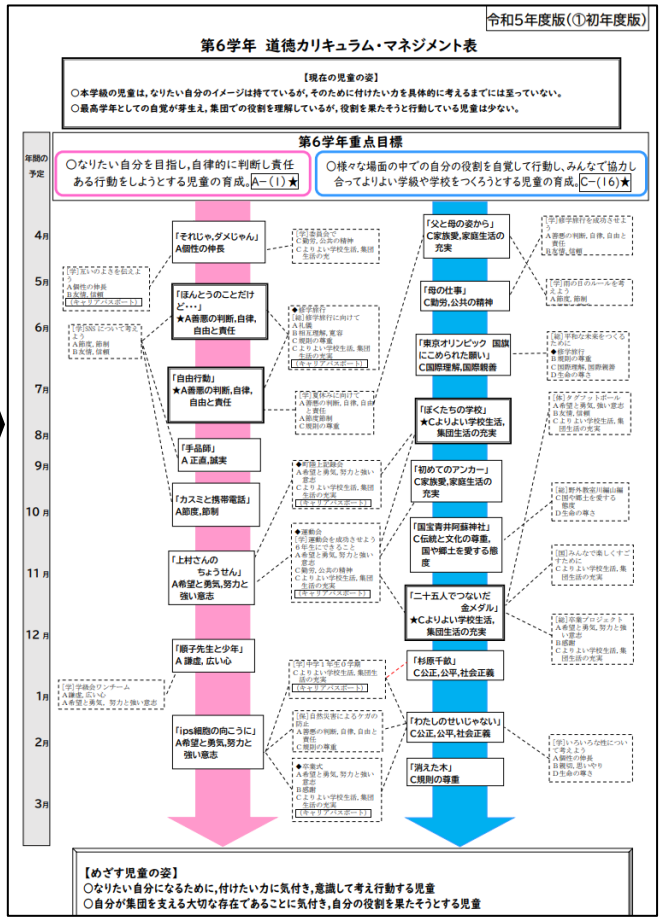


図１：令和３年度版（上）令和４年度（下）と、今年度版（右）の道徳カリキュラム・マネジメント表

ここで、道徳カリキュラム・マネジメントを充実させるために意識したのがＰＤＣＡサイクルである。まず初年度にプランを立て【Ｐ】、１学期に実践、チェック【ＤＣ】、夏休みに児童アンケート等を踏まえ、見直し・修正を行い、その後のプランを立てる【ＣＡＰ】という流れになっている。夏休みに修正した箇所については朱書きをし、変更点を意識しながらその後の計画を立てていくようにした。このように修正・改善を繰り返しながら、道徳科の授業を核とした教科横断的な教育活動に取り組んでいった。

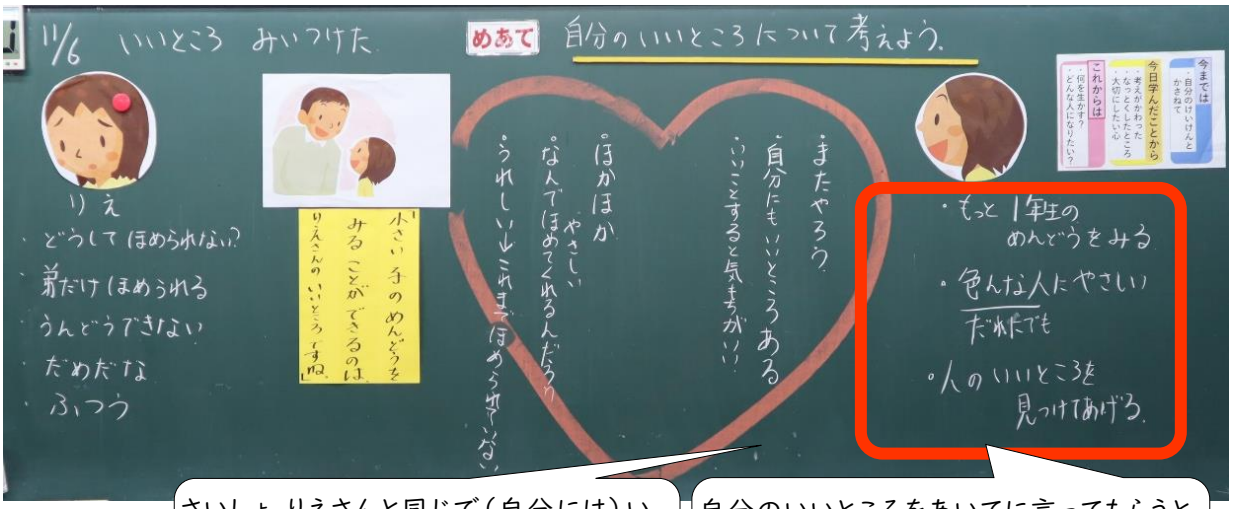
以下、道徳の授業と他教科等をつないだ実践を取り上げる。

【第２学年：内容項目「Ａ個性の伸長」に関連する学習活動の取組】

道徳科で「いいところみいつけた」の授業をした後に、学活で「いいところを見つけよう」という活動に取り組んだ。道徳の時間に、自分のよさに気付いてもらえた主人公の気持ちを考え、自分のよさを見つめ直したことで、学活では、友達のよいところに関心をもって意欲的に考える姿が見られた。自分や友達のよさを認め合うことの心地よさを知ることで、自分のよさを見つけることに対する児童の実践意欲につながっていった。

【道徳】「いいところみつけた」

ねらい：山本先生の言葉を聞いてうれしくなったりえさんの気持ちを考えることを通して、自分の特徴を振り返ったり自分のよさを見つけたりすることの大切さに気付く。

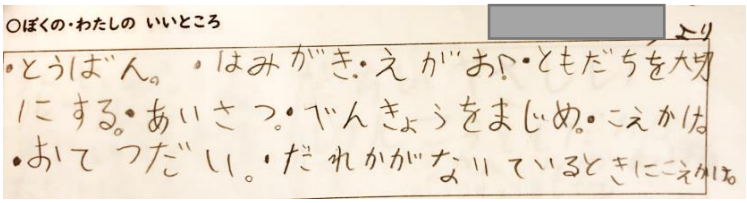


さいしょ、りえさんと同じで（自分には）いいところがなかったから、つぎから自分のいいところをさがしていこうと思いました。

自分のいいところをあいてに言ってもらうとうれしいとしりました。これから、ともだちがいいことをしていたら、つたえたい。

【学活】「じぶんのいいところを見つけよう」

○友達のいいところをシートに書き合い、学級全体で共有し合う。



【体育】「ボール投げゲーム」

○活動時に、友達のよかったところやできるようになったことなどを、チームや全体で出し合う。

○互いのよさに気付き合う時間を意図的に設定し、関心をもって関わることができるようにする。

【第６学年：内容項目「Ｂ感謝」に関連する学習活動の取組】

道徳科で「おかげさまで」の授業をした際、振り返り場面で「みんなのおかげさま」となる存在を出し合った。本時では、感謝の気持ちをもつことやその思いを伝えることの大切さについて考えたことを通して、児童は身の回りの人たちに対する感謝の思いも膨らんでいった。そこで、国語の書くことの単元とつなげ、感謝の思いを伝える手紙を書き、実際に手渡すことで、感謝の気持ちを伝えるという実践意欲につなげるようにした。

【道徳】「おかげさまで」

ねらい：「おかげさまで…。」の意味を考えることを通して、自分たちの生活が多くの人々の力によって成り立っていることに気付き、そのことに感謝し応えていこうとする心情を育てる。

・色んな人に感謝していこう。
・周りの人のありがたさに気付いた。
・支えてくれる人のことを思っている。

・「おかげさまで」をたくさんつたえたい。
→みんなのおかげさまを考えて、感謝の気持ちを伝えよう

【国語】「夏のさかり」→手紙を書こう

○自分たちがお世話になっている人へ感謝を伝え手紙の書き方を学び、実際に手紙を書く活動に取り組んだ。

○作成した手紙は自分たちで渡し、感謝の気持ちを直接伝えることができるようにした。

地域ボランティアの方に手紙を渡す児童

（２）「なりたい自分」と児童の生活をつなぐキャリアパスポートの工夫

児童一人一人が「なりたい自分」への意識を明確にもち、自身の学校生活とつなげて考える意識を高めるために活用したのがキャリアパスポートである。本校では、各学年の実態に応じたオリジナルのシートを作成した。児童は「なりたい自分」を設定し、それに近づくための「成長させたい力」を考え、見通しをもち意欲的に過ごせるようにした。

実際には、低学年は「こんな自分になりたいな」というめあてを立て、学期ごとに振り返りができるシートを用いた（図２左）。高学年は、将来の自分や１年間というより長いス

パンで見通すことができるシートを使い、年度当初に立てた自分が成長させたい力と関連させながら自分自身を振り返ることができるようなシートを活用した。

【本校のキャリアパスポート】 学期ごとになりたい自分を設定し、振り返りを行う。
→次の学期にがんばることや、なりたい自分を考えていく。

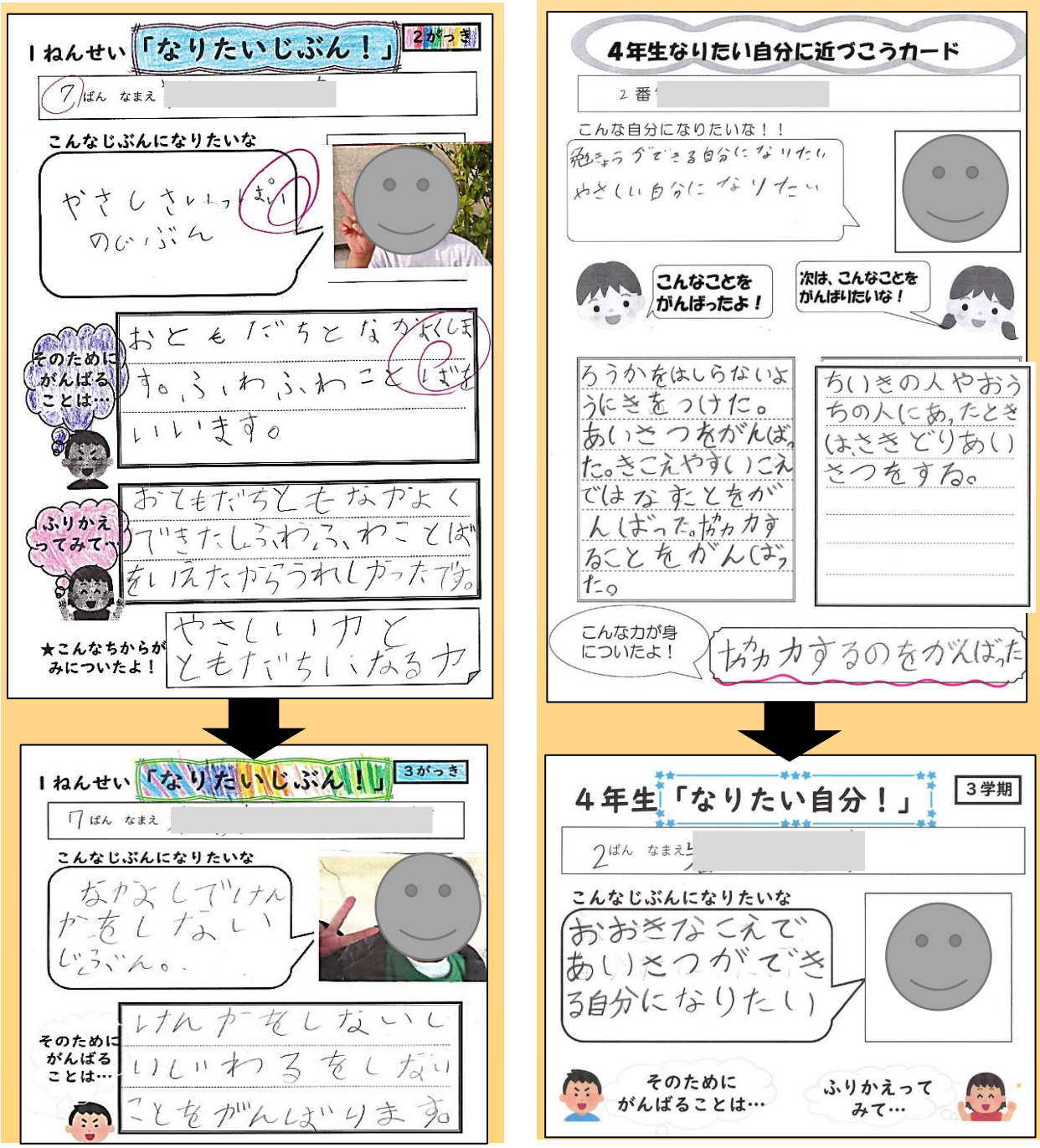
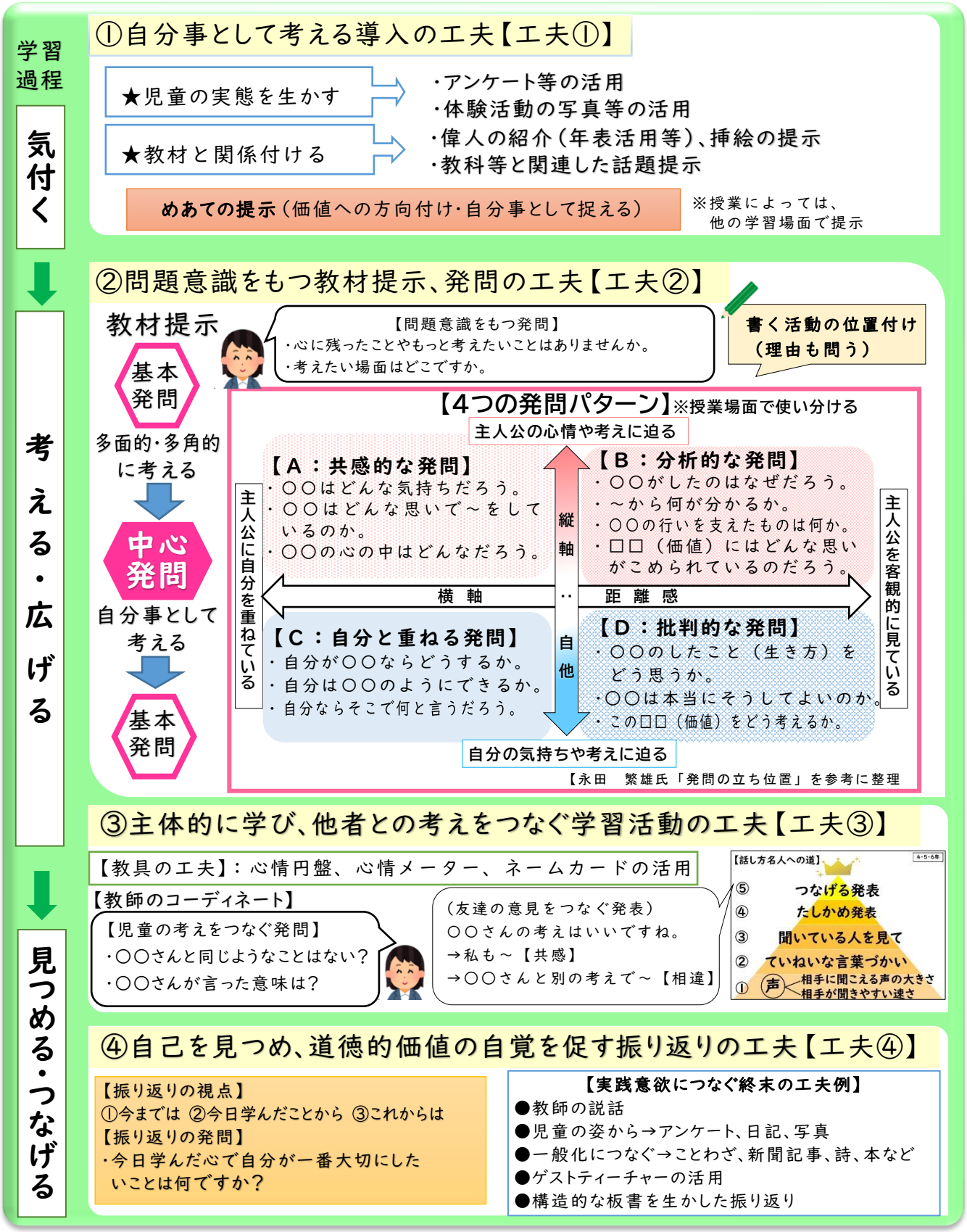


図２：児童が書いた２学期と３学期のキャリアパスポート（左：１年生、右：４年生）

キャリアパスポートは定期的に振り返り、今の自分を見つめ直すと共に、授業だけでなく日常生活での道徳的価値の高まりにつないでいった。さらに、児童自身が将来への前向きな展望をもてるよう、教師は励ましの声掛けやコメントを書くよう心掛け、学級全体でなりたい自分への意識を高めていった。

２　【手立て２】児童が主体的に学び、考えを伝え合う授業づくりの工夫

本校では、授業の基本の型として、以下のような学習過程の図を作成した（図３）。この展開例を基本とし、児童の実態、内容項目、教材に応じて柔軟な授業構成につないでいった。



※上記は学習過程の基本の型とし、児童の実態、内容項目、教材に応じて柔軟な授業構成につなぐ。

図３：授業の学習過程の図（基本の型）

（１）授業展開における４つの工夫

まず、道徳科の授業づくりにおいて基盤となるのが本時のねらいである。そこで本校では、「内容項目」「教材」「児童の実態」という３つの視点を基にして本時のねらいを設定し、教師が、目指す児童の姿を明確にもって授業づくりを進めるようにした。

ア　自分事として考える導入の工夫

導入場面において児童の興味・関心を引き付けることは、学びへの主体的な態度を育む上で欠かすことができない。特に道徳科では、自分事として考え実践意欲につないでいくために、児童の実態を生かした導入や教材提示の工夫を行った。

イ　問題意識をもつ教材提示、発問の工夫

教材を読む場面では、学年の発達段階によって教材提示の仕方を工夫し、児童一人一人が問題意識をもって考えることができるようにした。また、発問を考える際に参考にしたのが、図３に示した「４つの発問パターン」の型である（永田繁雄氏の著書を参考）。授業で扱う発問を分類することで、「この発問をするねらいは何か」「どの発問だったらねらいに迫ることができるか」など、教師自身が発問の意図を客観的に検討することにつながった。また、４つの発問パターンを縦軸と横軸で整理し直し、主人公との距離感と自他との距離感で捉え直すようにした。軸を設定したことで、発問を分類する際の比較がしやすくなり、多様な発問を取り入れていくことにつながった。

ウ　主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の工夫

児童が考えを伝えたいと思うような場の設定を工夫したり、心情円盤やネームカード等など教具を取り入れたりすることで、一人一人の考えを明確にして互いに考えを伝え合うことができる学習活動の工夫を行った。児童が考えたくなる、発言したくなるような教材・教具の工夫を行い、主体的な学びが生まれる学習活動の工夫を行った。

エ　自己を見つめ、道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫

本時の学びが児童の実践意欲に結びつくことを目指し、振り返り場面では自己を見つめることができる多様な活動を取り入れた。教師の説話の他に、学校生活の様子を写真で着目したり、道徳的価値の一般化につなぐ諺や詩の紹介、ＧＴとして地域の方々や保護者の話を聞いたりした。また、構造的な板書の工夫を行い、教材から学んだ道徳的価値を児童の言葉で示すことで、振り返りで自分事として考えることができるようにした。

そこで、３本の授業実践で検証をしていく。

【実践例①】第１学年　「二わのことり」の授業実践から

「二わのことり」
出典「小学道徳　生きる力
１年（日本文教出版）

教材

児童の実態

相手がいい気持ちになる言葉を選び、関わろうとする意識が高まりつつある。一方、自分と異なる考えを受け入れることが難しく友達と言い合いになる場面も見られる。

内容項目

【友情、信頼】

【ねらい】
友達が一人ぼっちでいるときにどうすればよいかについて役割演技を基に考えることを通して、友達のために行動することの大切さに気付くとともに、実践意欲につなげる。

学習活動　（・児童の反応）　教師の発問	授業改善の観点
１「友達」についてのイメージを全体で共有する。 ○「ともだちは○○」、どんな言葉を入れたい？ ・たすける、なかま、なかよし ○ともだちは、いつもなかよしかな。 ・けんかするときもあるけど・・・	【工夫①】 友達と関わっている場面の写真を提示し、友達に対するイメージを全体で共有できるようにした。
２ 教材を読み、主人公（みそざざい）の気持ちを軸に考える。 ○話を聞いて、心に残ったこと、疑問、みんなで考えたいことは？ ・みそざざいが、最後にうぐいすさんのところに行ったのがいいと思った。 ・やまがらさんは、だれもこなくてさびしかったと思う。 ３ 本時のめあてを提示し、全体で話し合う。 **【めあて】やまがらさんのために自分ならどうする？** 基本発問　○練習を途中でそっと抜け出してやまがらのうちへ行ったみそざざいのことをどう思いますか。【D:批判的な発問】 （ロイロノートに考えを提出する） ・とてもよい→一人ぼっちにしなかったから。 ・あまりよくない→うぐいすさんにだまって練習をぬけだしたから。 中心発問　○やまがらさんのために、自分ならどうする？（役割演技を行う）【C:自分と重ねる発問】 ・さいしょからやまがらさんのところに行く。 ・うぐいすさんに言ってから、やまがらさんのところに行く。 ・うぐいすさんと一緒に、やまがらさんのところに行く。 「やまがらさん、一人ぼっちにしてごめんね。」 「うぐいすさん、今日はやまがらさんの誕生日だから、一緒にお祝いに行こう。」 ○みんなの考えを聞いて、自分ならどうするかもう一度考えてみましょう。（ワークシートに書く）【C:自分と重ねる発問】 ・「やまがらさんのたんじょうびだから」と言って、「いいよ」と言われたらやまがらさんのいえに行きます。わけは、誕生日だから。 ・ぼくだったら、やまがらさんが一人になるからやまがらの家に行く。 ・うぐいすをさそって行く。わけは、みんなで行ったら楽しいから。	【工夫②　】 感想交流を行った後に本時のめあてを提示し、やまがらの行動をより自分事として検討することができるようにした。 【工夫③　】 やまがらの行為を4件法を用いてロイロノートで表示することで、自分の立場を確かめるとともに、友達の考えに関心をもてるようにした。 【工夫④　】 役割演技を通して、具体的な実際の場面を想像し、行動したときの気持ちに迫ることができるようにした。
４ 自分自身を振り返る。 ○今日の学習は、これからのみんなに、どんなふうにつながるかな？ ・これからは、一人ぼっちの人がいないように声をかける。 ・相手の気持ちを考えて、「一緒にあそぼう」とか言いたい。	【工夫⑤】 児童の考えをキーワードで分類しハートで示すことで、多面的・多角的な意見があることを視覚的に意識できるようにした。

ア　自分事として捉える導入の工夫

友達についてのイメージを全体で共有するために、学校生活の写真を提示し（図４）、「友達は〇〇」という言葉について考えた。児童は「たすける、なかま、なかよし」という言葉を出し、友達に対する考えを全体で確認することができた。

図４：提示した学校生活の写真

イ　問題意識をもつ教材の提示、発問の工夫

みそさざいの行為について４件法（とてもよい、すこしよい、あまりよくない、よくない）で検討し、自分の考えをロイロノートに提出した（図５）。全員の考えを電子黒板で確認し、その理由を尋ね合うことで、登場人物たちの気持ちを考え、よりよいと考える行動について具体的に捉え直すことにつながった。

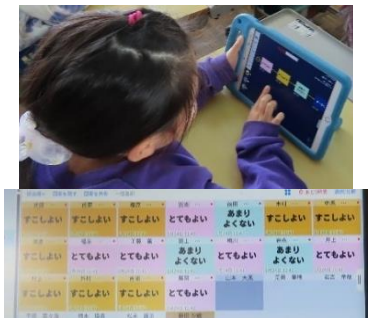


図５：ロイロノートの提示の様子

1年生の発問例《教材名「二わのことり」、内容項目：友情、信頼》
〇練習をそっと抜けだしてやまがらのうちへいったみそさざいのことをどう思いますか。【D:批判的な発問】 〇やまがらさんのために、自分ならどうする？　【C：自分と重ねる発問】

ウ　主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の工夫

主発問の場面では、役割演技の活動を取り入れることで、実際の場面での関わりを検討し、一人ぼっちになった友達のためにどうするか具体的に考えることができるようにした（図６）。

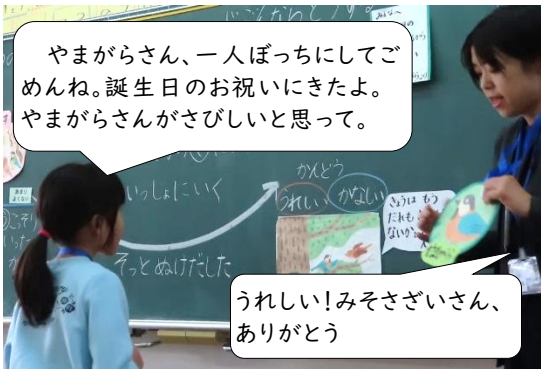


図６：児童と教師の役割演技の様子

児童は、教材文の内容にはない「うぐいすに事情を伝えて行く」や、「うぐいすたちも一緒に誘ってお祝いする」ことを発案し、相手の気持ちを考えた上でどのように行動するのがいいか、みそさざいになり切って考えたり関わったりすることができていた。この演技でよかったところを全体に問い返すことで、友達のために行動することのよさを学級全体で確かめることにつながった。

エ　自己を見つめ、道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫

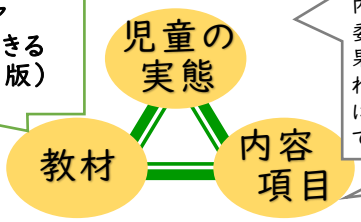
振り返りでは、板書を基にして、大切にしたい心や自分の生活とのつながりを考えるようにした（図７）。児童は、「友達を一人ぼっちにしたくない」や、「自分で気づいて声をかける」など、もし自分だったら何ができるかという視点で考えている記述が多く見られた。

〇もしじぶんだったら、やまがらさんのおうちにいきます。わけは、うぐいすのところにずっといたら、やまがらさんが　かなしいとおもったからです。
〇もしわたしだったら、うぐいすさんのおうちにいることりのなかまにいって、みんなでやまがらさんのおいわいにいきます。
〇これからは、一人ぼっちにさせないほうがいいということがわかりました。そのために、まわりを見てこうどうします。

図７：児童が書いたワークシートの記述

【実践例②】第４学年　「ネコの手ボランティア」の授業実践から

ネコの手ボランティア
出典「小学道徳　生きる力４年（日本文教出版）

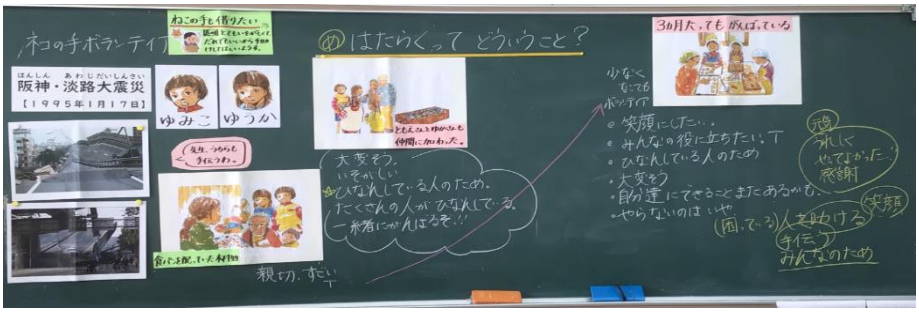


意識アンケートの結果から学級内の係活動や当番、学校全体の委員会活動などの自分の役割を果たしている児童が多い。決められた活動だけではなく、人のために進んで働こうとする児童になってほしい。

【勤労、公共の精神】

【ねらい】避難所でボランティアとして働く侑加や由美子の思いを考えることを通して、働くことの意義に気付き、進んで人のために働こうとする心情を育てる。

学習活動（・児童の反応）　教師の発問	授業改善の観点
１　本時の学習課題を知る 〇学級の当番や係活動、委員会などで一人一人がんばっています。 （写真提示） ２　29年前の阪神淡路大震災の資料を見せ、社会で学習した共助について想起させ、熊本地震や北陸地震と重ねながら考える。 災害が起きて、大きな被害が出たとき、みんなにできることは何だろう。 ・募金はしたことある。　・できることあるのかなあ。 【めあて】はたらくってどういうこと？	【工夫①】 学校生活の写真を提示することで、自分たちも役割を果たしていることに気付かせた。社会で学習した自助・共助・公助を想起させ、学んだ知識と自分自身を重ねて本時のめあてにつなげた。
３　教材を読み、登場人物の気持ちや考えについて話し合う。 話を聞いて、心に残ったことやみんなと考えたいことを発表しましょう。 ・大変そうな先生のために手伝ってすごい。 ・3か月たっても、避難している人が少なくなってもボランティアをしてすごい。 基本発問「侑加さんや由美子さんはどんな思いで夕食配りを始めたのだろう。 【A:共感的な発問】 ・先生が大変そうで忙しそうだから。 ・避難している人のため ・たくさんの人が避難しているから、自分たちも一緒にがんばるぞ。 中心発問 3か月たっても4人がボランティアを続けたのは、なぜだろう。 【B:分析的な発問】 （書く活動→伝え合い→全体交流） ・みんなが元気に楽しく過ごせるようになってほしい。笑顔にさせたい。 ・みんなの役に立ちたい。 ・困っている人がいるのにやらないのは自分が嫌だからまだ続けるぞ。 ・まだ自分たちにできることがあるかもしれない。だから、困っている人を助けたい。喜んでもらえたらうれしい。 はたらくってどういうことだろう。　【C:自分と重ねる発問】 基本発問 ・働くとは、困っている人を助けること。笑顔にすること。 ・みんなのためにすることが働くこと。 ・感謝されるとうれしくなって「やってよかった」と思える。 ・チューリップの水やりやトイレのスリッパならべはすぐにできる。 ・休みの人の委員会や当番をすること。今もしてるから。	【工夫②】 教材文を聞いて、感じたことをペアで伝え合うことで自分と似ている感想や気づかなかった意見について知ることができた。全体で発表するときも考えを相違点でつなぎながら発表できた。 【工夫③】 先生の手伝いという行動から、自発的なボランティアへ変化した侑加たちの心情について考えることができるようにした。 【工夫④】 みんなのためにという相手意識と、継続できたのは感謝された喜びがあったからという自分自身の心情を重ねることで、働くことの意義について考えを深めた。
４　人のために進んで働くことについて考え、自分の生活を振り返る。 今日の学習から①今までの自分②今日学んだこと③これからの視点で自分のことをふりかえりましょう。 ・家でも学校でもいろんな「はたらく」がある。自分で見つけて働きたい。 ・今日学んだことは、働くとは困っている人を助けること。手伝うこと。 ・ありがとうと言われるとうれしいから、自分も「ありがとう」を言う。 ・縦割り掃除のとき、他の場所も手伝いたい。	【工夫⑤】 自分自身のことと重ね、働く側、してもらう側双方の思いに気づくことで、多面的な見方ができるようにした。



ア　自分事として考える導入の工夫

導入で、学校生活の中の当番や係、委員会の様子について、決められたことは責任をもって取り組んでいることを振り返った。さらに、阪神淡路大震災や熊本地震などの災害が発生した時に、たくさんの人の自助・共助・公助の力で復旧復興を成し遂げていった事実を振り返り、教材文の興味・関心を高めた。災害時のボランティア活動が特別なことではなく、日常生活の中で自分たちがお互いを支えあうために働いていることとつながっていることを導入の二つの事例提示から示し、本時のめあてにつなげた。

イ　教材提示の工夫・発問の工夫

教材提示では、児童の内容理解を促すためにキーワードなどを示し、紙芝居で教材提示を行うようにした。提示後、「①心に残ったこと②みんなと考えたいこと③疑問」の３つの視点で感想交流を行った。感想を交流する中で、教材の内容の理解を図り、中心発問から授業を展開できた。発問は、「A：共感的発問→B：分析的な発問→C：自分と重ねる発問」という構成で授業を展開した。様々な視点の発問を構成したことで、活発な意見交換につながった。

4年生の発問例《教材名「ネコの手ボランティア」内容項目：勤労、公共の精神》	
○どんな思いで夕食を配り始めたのだろう。	【A：共感的な発問】
○3か月たってもボランティアを続けたのはなぜだろう。	【B：分析的な発問】
○はたらくってどういうことだろう。	【C：自分と重ねる発問】

ウ　主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の工夫

中心発問では、書く活動を取り入れ、書き終わった児童から互いの考えの交流を行った（図８）。交流を図ることで、新たな考えに気付いたり自信をもって発表をしたりする姿につながった。交流活動では、意見をつなぐことを意識して発表した。本校の共通実践事項である発表の仕方を提示し取り組み、「なるほど。」「わかる。」「あ、そうかあ。」などのつぶやきを大切にしてきたことで、相手意識をもち、学習を展開することができるようになってきた。

図８：自分の意見を発表する児童

エ　道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫

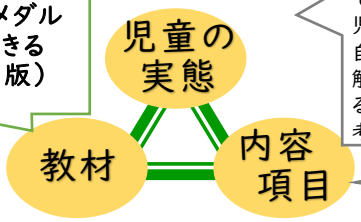
振り返りでは、本校で取り組んでいる振り返りの視点を基に、本時のめあてを生かし、働く意義、自分にできることなど多面的な見方ができ、多様な振り返りに広がった（図９）。価値の自覚化が行動へつながっていく振り返りもあり、価値の深まりが見られた。

○はたらくとはどういうことなのか分かった。これからは、困っている人がいたら、助け合って、自分にできることを続けていきたい。
○これから、人に見られていなくても、頼まれなくても、自分からできることを見つけて、進んで動きたい。
○はたらくとは、当番だけではなくて、困っている人を手伝ったりすることだと分かった。一つでも役に立つと自分もうれしいから、これから働いていきたい。
○だれかのために働くのは気持ちが良いと思う。縦割り掃除で一年生からありがとうと言われてうれしかった。自分も感謝を伝えていきたい

図９：児童が書いたワークシートの記述

【実践例③】第６学年　「25 人でつないだ金メダル」の授業実践から

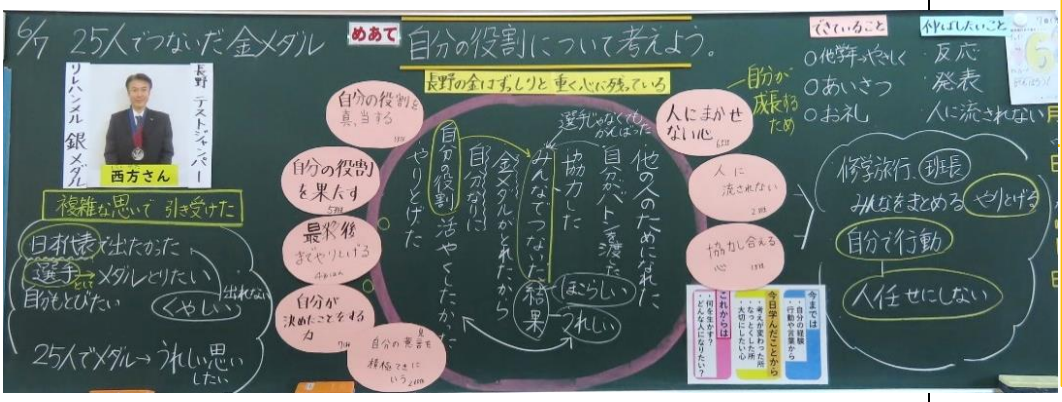
25人でつないだ金メダル
出典「小学道徳　生きる力6年（日本文教出版）



意識アンケートの結果から集団での自分の役割を理解している児童は4割の児童しかいない。自分の役割について明確に理解し、自分の役割を果たそうとする児童への手立てが必要だと考える。

【よりよい学校生活、集団生活の充実】

【ねらい】自分が取ったわけではない金メダルが心にずっしりと残った理由を考えることを通して、一人一人が集団を支える大切な存在であることに気づき、自分の役割を果たそうとする心情を育てる。

学習活動（・児童の反応）　教師の発問	授業改善の観点
1　本時の学習課題を知る。 最高学年として、できていること伸ばしたいことは何ですか？（写真提示） ・協力する力はできている。 ・進んで動く力ができていない。 2　西方さんのインタビュー動画を視聴する。 西方さんは何とおっしゃいましたか？ ・役割を果たす。 【めあて】自分の役割について考えよう。 	【工夫①】 できていることと伸ばしたい力を左に板書することで中心発問と自分たちの生活とのつながりが感じられるようにした。
3　西方さんの経歴や言葉を紹介し、教材に興味をもたせる。 西方さんの気持ちを考えながら聞きましょう。 話を聞いて、心に残ったことやみんなと考えたいことを発表しましょう。 ・視野が悪く、最悪の状況でも跳んだところがすごい。 ・西方さんの仲間を信じる心がすごいと思った。 基本発問「なぜ西方さんは複雑な思いでテストジャンパーを引き受けたのだろう。 【A:共感的な発問】 ・選手として金メダルを取りたかったから。 ・ケガしていなければ、選手として出られたのに悔しいから。 ・それでも選手たちを支えたいから。 中心発問 長野の金メダルがずっしりと重く心に残ったのはどんな思いからだろう。 （書く活動→伝え合い→全体交流）　【B:分析的な発問】 ・自分のためだけではなく仲間のために飛んだから。 ・自分にできることをやり遂げたから。 ・注目されようがされまいが、自分にできることをやって納得しているから。 基本発問 西方さんの姿や今のクラスを見て、自分たちに必要な力は何かな。 【C:自分と重ねる発問】 ・失敗を恐れない力　・一人でも行動する力 ・流されない力　・考えて行動する力	【工夫②】 西方さんの動画を視聴し人物像をつかんだ後に教材提示を行うことで、問題意識をもつことができる学習への方向付けにつなげた。 【工夫③】 注目されなくても役割を果たす西方さんの気持ちを考えることで、役割を果たすときに大切な心について考えることができるようにした。
 	【工夫④】 西方さんが役割を果たすときに大切な心について視覚化できるような板書の工夫を行った。西方さんと自分たちを重ねて考えることができるようにした。
4　集団の中の自分の役割について考える。自分の生活を振り返る。 自分が特に大切にしたい心を決めて、どんな時に伸ばしていきたいかを考えましょう。 ・修学旅行の班長として、一人の人がいないようにみんなに声掛けをしていきたい。 ・お互いに声を掛け合い、委員会の委員長として、言われる前に自分で考えて行動したい。	【工夫④】 西方さんと自分自身を重ねて考えたことで、自分の生活を振り返って見つめることができるようにした。

ア　自分事として捉える導入の工夫

導入では、最高学年としてできていることや伸ばしたいことについて児童と考えた。自分たちの姿を通して、集団の中の一員という視点で役割を果たしていることについて考えることで、学習の方向付けにつなげるようにした。

イ　問題意識をもつ教材提示、発問の工夫

本時の学習のめあてや教材内容につなぐために、西方さんの動画を視聴した（図１０）。西方さんがどんな人か、何を伝えたいのか確認することで、「自分の役割について考えよう」というめあてを設定できた。また、教材提示後、心に残ったことを話し合うことで、西方さんが役割を果たすときにどんなことを大切にしていたのかという中心発問につながった。

図１０：西方さんのビデオ視聴の様子

発問のパターンは、A：共感的な発問→B：分析的な発問→C：自分と重ねる発問で授業を構成した。

6年生の発問例《教材名「25人でつないだ金メダル」、内容項目：よりよい学校生活、集団生活の充実》	
○なぜ西方さんは複雑な思いでテストジャンパーを引き受けたのだろう。	【A:共感的な発問】
○長野の金メダルがずっしりと重く心に残ったのはどんな思いからだろう。	【B:分析的な発問】
○西方さんの姿や今のクラスを見て、自分たちに必要な力は何かな。	【C:自分と重ねる発問】

実話教材は、自分たちと遠い話だと考えがちになるが、自分と重ねる発問を取り入れたことで、終末の自分の振り返りがスムーズにできた。

ウ　主体的に学び、他者との考えをつなぐ学習活動の展開

中心発問では書く活動を位置付け、自分の考えをもち（図１１）、伝え合いから全体交流で取り組んだ。書く活動では、必ず理由も書くようにしてきたので、「自分の役割」の中でも、様々な根拠が示され、多面的・多角的な考えにつながっていった。また、学級の課題である相手意識をもって取り組むことの大切さにも気付くことができた。

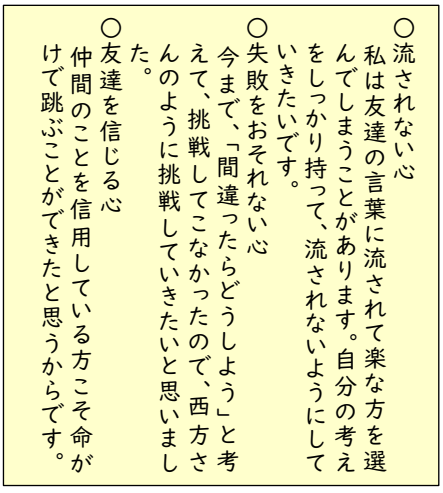


図１１：児童のシート

エ　自己を見つめ、道徳的価値の自覚を促す振り返りの工夫

西方さんと自分たちを重ねる発問後、学習の振り返りを行った。「①今までは②今日学んだことから③これからは」の視点で振り返り（図１２）、自分の姿やだれも見ていなくても取り組むことの大切さを実感する姿が見られた。

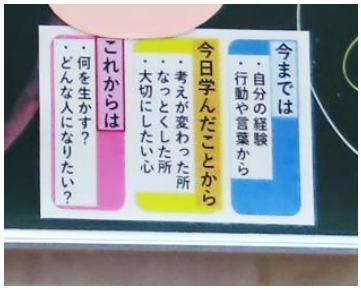


図１２：振り返りの視点の提示

（２）授業を支える共通実践事項

ア　聞く力・話す力の育成

児童が主体的に授業に臨み、周囲との対話を広げていくためには、聞く力、話す力を日常的に身に付けていく必要がある。そこで本校では、「聞き方、話し方名人への道」というカードを作成し、教室掲示をして活用している（図１３）。段階的に目標を設定し、低中高で実態に合わせた内容にしたことで、児童自身も客観的に振り返ることができ、学級・学校全体での共通意識を高めることにつながった。

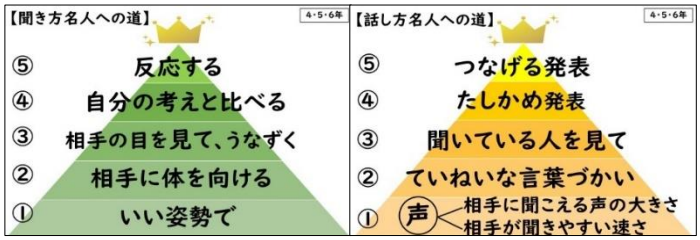
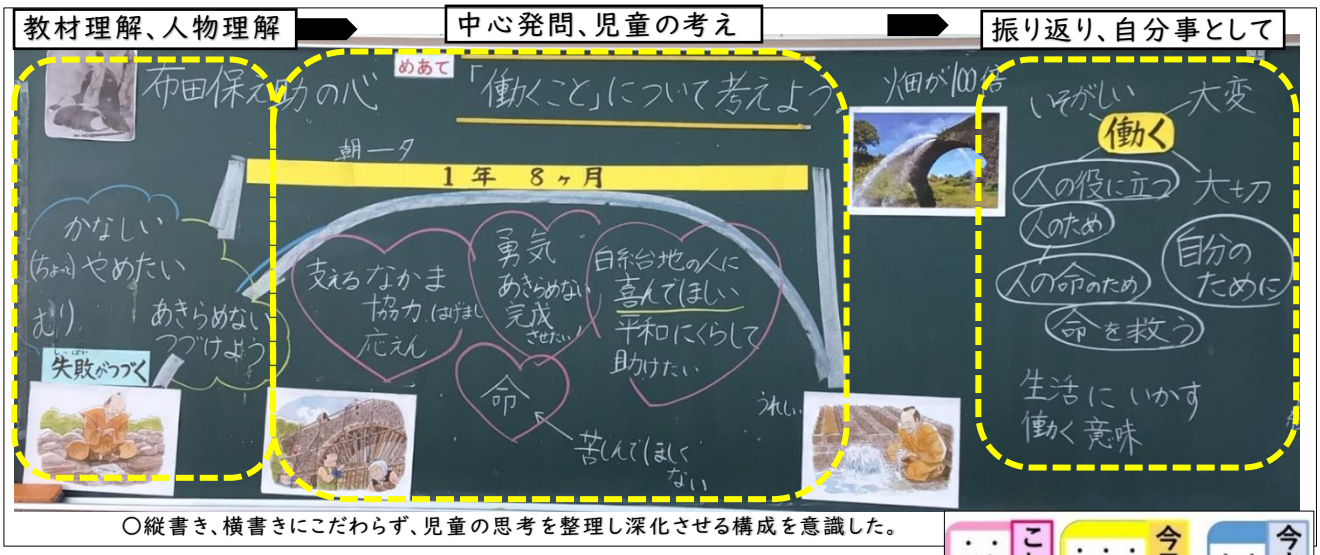


図１３：教室に掲示した「聞き方名人、話し方名人への道」

イ　構造的な板書の工夫

図１４は構造的な板書の工夫における実践例である。横書きの場合は左から、教材理解、児童の考え、振り返り等と板書を構成していくことで、児童の思考を整理し、道徳的価値の深まりを視覚化できるようにした。



○縦書き、横書きにこだわらず、児童の思考を整理し深化させる構成を意識した。

図１４：構造的な板書の工夫例（４年生）と振り返りの視点

ウ　振り返りの視点の提示

自分を見つめ、振り返る活動の充実を図るために、振り返り返りの視点を提示（図１４）し、本時の学びを自分自身と重ねて考えることができるようにした。また、教材によっては教材と重ねた振り返りを行うなど柔軟に活用している。

エ　学びの足跡を示す学級掲示

毎時間の授業での学びを日常的に振り返ることができるよう、教室掲示を行った。児童の発言と道徳的価値をつなげて内容を整理し、学びが積み重なっていることを自覚できるようにした。

図１５：教室の学びの足跡

３　【手立て３】道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫

（１）児童の主体性を伸ばす活動の充実

今年度から対面形式の集会活動を再開し、委員会活動の発表や児童会からの提案を行っていった。皆が集まり話を聞くことで、学校をよくするための取組を全校児童で共有できる場となった。また本校では、生活目標と学習目標を毎日チェックする「龍野の星」の活動を行っている（図１６）。１か月の振り返りは、「たっぴー集会（児童集会）」で報告し表彰することで、目標を達成しようとする児童の意欲の高まりがみられた。加えて、児童が主体的にきまりを守ったり相手意識を高めたりすることにもつながった。

さらに、達成状況をシールで示していくため、視覚的にも意識しやすく、自分たちの規範意識を見直したり自覚したりする手助けともなっている。

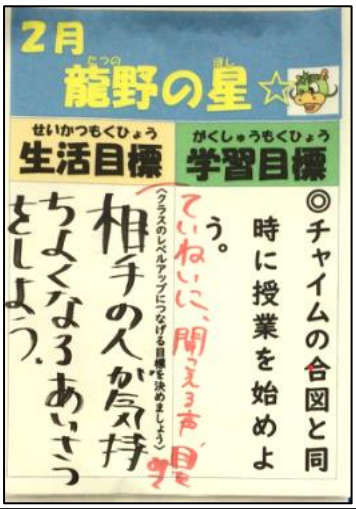


図１６：教室に掲示している龍野の星

（２）異学年交流を促す環境整備

コロナ禍で難しくなっていた異学年交流も、今年度は様々な場面で行うことができた。これらの取組を活動だけで終わらせないために、感謝の気持ちを伝えたりお礼の手紙を書いたりしながら、学年同士の関係を深めることができるようにした（図１７右）。

また、児童会から提案された「ひみつのキラリさん」活動では、友達のよいところを見つけ校内掲示を行った（図１７左）。普段なかなか伝えることのない互いのよさをカードに書くことで、一人一人のよさに関心をもったり受けとめてもらったりすることの心地よさを味わう機会となった。

図１７：「ひみつのきらりさん」カードの校内掲示（左）、１年生から６年生に贈ったお礼の手紙（右）

（３）教師のコーディネイト力を伸ばす研修の充実

児童に対する教師の日常的な関わりは、道徳教育を充実させる上での重要な一因となる。そこで、児童の自己肯定感を支えるような関わり方を学ぶ研修を設定した。教育コーディ

ネーターの松本裕子先生を招き、自尊感情が上がるような声掛けについて具体的に取り上げてもらい、教師が実践してみることで、学校生活に活用できるようにした（図１８）。私たち教師が日常的に使用する言葉が、児童の道徳性の育成に関わっていることを改めて自覚すると共に、学校生活の様々な場面において適切な声掛けを実践していくことの重要性を再確認することにつながった。

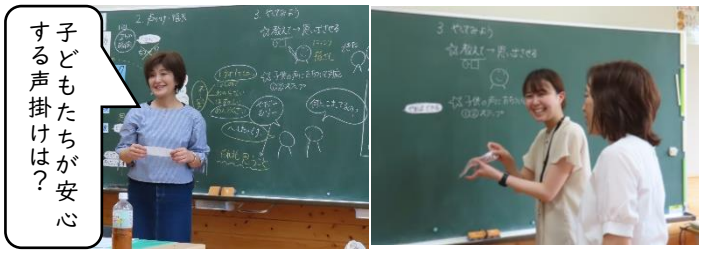


図１８：研修の様子

Ⅲ　研究の成果と課題

１　成果

（１）【手立て１】なりたい自分とつなぐ道徳カリキュラム・マネジメントの充実

○　道徳カリキュラム・マネジメント表を作成し活用を続けてきたことは、道徳授業を他教科と関連させて教育活動に取り組んでいこうとする教師の共通理解につながった。表に記されていなくても、道徳科の授業とつなぐ意識が高まり、普段の授業づくりに生かされていった。

○　本校独自のキャリアパスポートを作成し取組を行ったことで、児童がなりたい自分を意識して自分の生活を振り返ったり見通したりすることにつながった。表１より、８割以上の児童が「自信のあることや自慢できることがある」と答えている。「将来の夢や目標がある」と答えた児童の割合も、昨年から継続して高水準を保っており、児童が前向きに自分の生活を見つめ直していることの現れと考える。

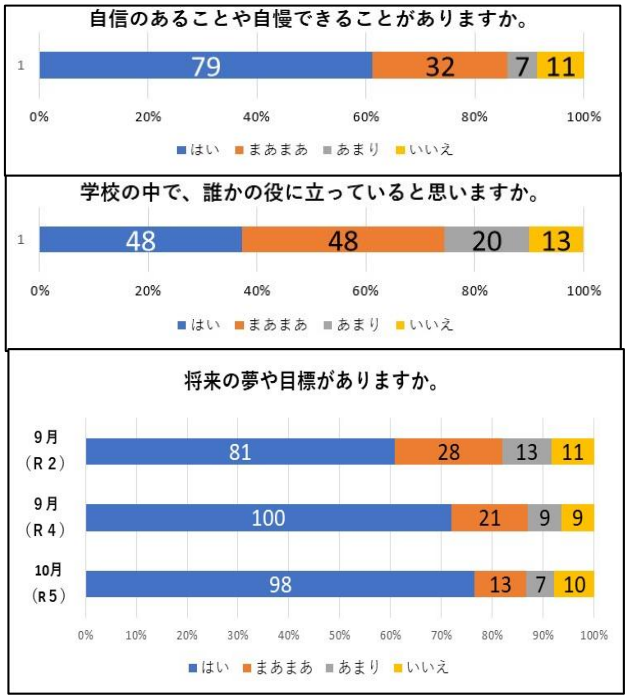


表１：児童アンケートの結果①
（数値は児童数を示す）

（２）【手立て２】児童が主体的に考え、他者と共に学び合う授業づくりの工夫

○　授業展開における４つの工夫を意識した授業づくりを行うことで、児童が主体的に考え発表しようとする学習の充実につながった。発問の仕方を整理し、発問を精選した授業づくりに努めたことで、児童の多面的・多角的な考えを引き出すことができた。基本

的な学習過程を軸とした共通実践を基に、授業改善を行った成果だと考える。

○　校内研修では、模擬授業を土台として授業研究に取り組んできた。教師の実践を交えながら具体的な助言、アドバイスを出し合い検討を行ったことで、授業構想を改めて捉え直すことができ、様々な視点から授業を改善していこうとする教師の意識の高まりにつながった。

（３）【手立て３】道徳教育の充実につなぐ日常活動の工夫

○　道徳科の授業に限らず、日常生活の中で児童の道徳性を高めることを意識したことで、児童が意欲的に活動に取り組んだり、学年を越えて活発に関わろうとする児童の姿が見られた。表２より、８割以上の児童が学校は楽しいと答えており、児童が安心してくらすことのできる学校づくりにつながっている。ただ、「あまり」「いいえ」と答えた児童が２１名いるため、その実態を把握し、居心地のよい学校づくりに向けた今後の継続的な関わりが必要である。

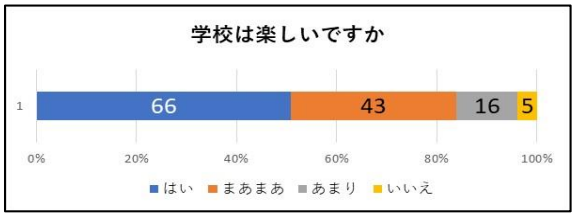


表２：児童アンケート結果②

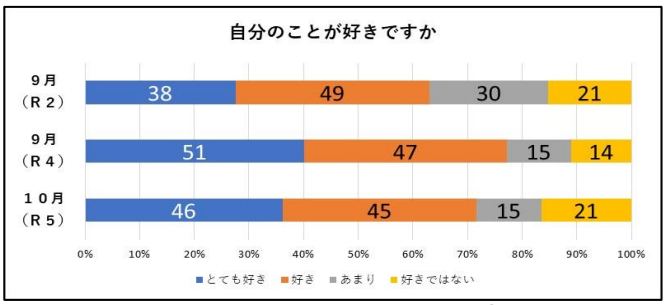


表３：児童アンケート結果③

２　今後の課題

【手立て１】

道徳カリキュラム・マネジメント表については、日常的に振り返ったり改善を重ねていったりする継続的な活用のあり方が課題である。道徳科の授業で終わらせない意識と、他教科とつなぐという見通しをもった柔軟な発想を大切に、今後も道徳教育の充実を図っていく必要がある。

【手立て２】

本校で作成した学習過程の基本の型に加え、児童の実態や教材や内容項目に応じて、型にこだわらない授業づくりのあり方も模索していきたい。４つの学習活動の工夫を基本とし、ねらいに迫る発問構成を考え、児童の多面的・多角的な考えを引き出すことができるような授業改善に今後も取り組んでいく。

【手立て３】

表３より、本年度は、「自分のことが好き」と答えた児童の割合が昨年に比べ若干少なくなった。様々な要因が考えられるが、児童の自己肯定感を支えることのできる活動の充実が今後も求められていることの表れでもある。道徳教育を軸とし、児童の「なりたい自分」の実現に向け、今後も継続して実践を重ねていく。

おわりに

熊本県教育振興基本計画「第３期くまもと『夢への架け橋』教育プラン」の基本理念である「夢を実現し、未来を創る　熊本のひとづくり」を念頭に置いて、子供たちの「夢を育み、拡げ、支える」教育の実現を目指し、全職員で共通理解・共通実践を行ってまいりました。

そして本年度は、研究主題「自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を育む道徳教育の充実」という目標の達成に向け、「主体的に学び、考えを伝え合う道徳の授業づくり」という研究課題を全職員で協議し、授業構想案や展開を工夫しながら、全職員の授業力向上に取り組んでまいりました。これは、道徳の研究指定を受けた令和３年度から、本年度の令和５年度まで３年間で深化をしてきた研究となります。「なりたい自分」を合い言葉として、子供たちの「自尊感情を高める」ためには、どうすればよいか。このことを学力向上にどのようにつなげるかを協議し、試行錯誤しながら推し進め、一定の成果を得ることができました。「学校総体の取組の工夫」として、学校行事等に多くの地域の方々や保護者のご参加を促し、「地域とともにある学校づくり」と関連させながら、地域との交流や体験活動を通して子供たちの感性や道徳性を高め、育む教育環境づくりにもつなげてきました。これまでの取組を検証し、更に深めてまいります。

最後に、子供たちのよさを「認め、ほめ、励まし、伸ばす」教育行動指標を踏まえた教育実践のために、ご指導、ご助言を頂きました関係諸機関及び諸先生方に深く感謝の意を表し、まとめといたします。

《参考文献》

〇文部科学省：小学校学習指導要領解説総則編、２０１７
〇文部科学省：小学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編、２０１７
〇熊本県教育委員会：熊本の学び推進プラン、熊本県教育庁教育指導局義務教育課、２０１９
〇田沼茂紀編：問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり　学びのストーリーで「自分ごと」の道徳学びを生み出す、東洋館出版社、２０２０
〇道徳教育、明治図書出版、２０２３

《研究同人》
・山下清孝　・福永道子　・奈須房子　・鬼塚亜紀　・藤田沙織（研究主任）　・岩永光央
・松本賢裕　・松岡さゆり　・田中　樹　・大野なつき　・稲葉典花　・池松孝一
・梅野　力　・宗　小百美　・中原弘典　・木村美保　・野仲　泉　・仲原里美